

してある、那珂博士が侍衛と譯せられたのは如何なる據があつてかは知るに由ないが、今蒙古語について之を求めて見ると、既に箭内學士の擧げて居らるゝ如く *torgha-* に縁故のある語と見なければならぬ、但し同氏の説かるゝやうに土見合兀惕 *torkhaut* が直ちに不定法なる *torghakhu* の複數の形とは考へ得られまい、一旦 *torgha+ghul* の形になつて、それが複數形なる *torghaghut* となつたと見るならば差支ないであらう、Schmidt の字書を調べて見ても *torghaghuli* なる語は見えて居つて *die Strafe, Geldbusse* などの譯が施してある、又この語が *torgha-* から起つたとすれば、意味は勿論阻止する、抑留する (*aufhalten, zurückhalten*) 等を原義として前述の如く刑罰・罰金等の意を有する *torghaghuli* なる語も生じ、之を番直の一隊の名にするに至つたものとも見られやうが、それでは役目に適切に應じた言葉とは思はれない、然るに別に此の語をトルコ語として考へて見ると、既にウイグル語としてクダツク・ビリクの中に現はれて居る、即ち Radloff 氏に據ると *Turyak* はウイグル語チャガタイ語で夜番人・番兵・哨兵 (*der Nachtwächter, die Schildwache*) の義であると見え (Radloff. *ibid.* III. 1457) *Vambéry* 氏に據るも *turgak=Wache* (*Angestellter*) と見えて居る、勿論語尾の *t* は蒙古語に於る複數形として之に添はつたものと考え、而してトルコ語としての此の語の構成は立つ、居る、在る等の意なる *tur* を語根とした *tur+yak* の形であるといふ *Vambéry* 氏の考は正しいものと思はれる、即ち立つて居るといふことを原義にして、立番、番人、哨兵等の意味なる語を生じたに相違なからう、而して之が既にウイグル語としてクダツク・ビリクの中に見えて居るとすると、蒙古の土見合兀惕はこの語の傳へられたものに相違ないと思ふ。

次に豁兒赤ゴルチ即ち祕史に帶オフル弓箭ユミヤチ的モノと譯し、元史に佩ニ囊韃ニ侍ニ左右ニと解き、那珂博士の箭筒士と譯されたる語に